

# 札幌市近郊の蔬菜農家



中原 忠 夫

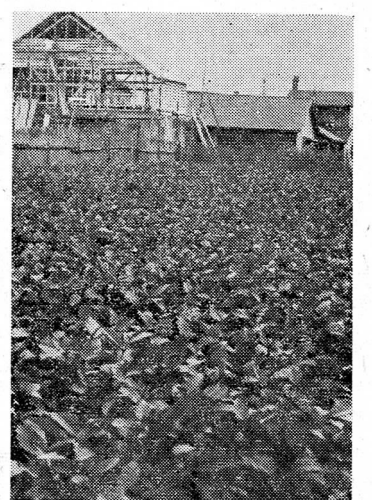
宅地に囲まれ転換期に直面している営農を技術で支えている海老名さん

札幌近郊の蔬菜生産地を視察するため、琴似に足を運んだところ、以前トマトやカシランを作つては名人芸といわれた人達の如も、入りこんだ小路に面して建てられた家並に今はすつかり見当もつかなくなつてしまつた。ここ数年の札幌を始めとする都市の急速な膨脹は日本経済の発展を象徴するものであろうが、一面宮々辛苦数十年にわたつて続けられた営農の跡地に、僅かの間に見違えられる様な近代都市の建設と、その谷間に今尚続けられる農業を見ると、日本農業のおかれた縮図を明示している様に考えさせられるものがある。

元来、琴似町の札幌寄りの一帯は札幌市への蔬菜の供給地として発展し、都心にも近く、円山市場の隆盛にも何われ、技術的にもかなり進んだものを持つていたが、今は既に昔の面影はなく、より郊外の西野方面に移つてしまつた。このような環境の中で一貫して土地を守り、新しい蔬菜作りの意欲に燃えている海老名庄市さんの経営を紹介してみたい。

## 海老名さんの経営内容

海老名さんの耕作面積は三畝で、既に周辺は住宅に囲まれている。もともとこの一帯は低湿地だつたのを先代以来、客土、暗渠排水に努力され、今日の営農が築かれたわけ、土地に対する愛着と技術は、宅地化を考へるところかむしろ、一層新しい作物、新しい経営に一途に努力されて、その熱意には敬服した次第である。労力は海老名さん夫婦に常備二人、臨時は繁閑による



畑の囲りに続々建つ住宅

が三〜五人を入れて当てている。

作付の主なもの、キウリ六〇㍥、トマト四〇㍥、ナス二〇㍥と果菜が大部分を占めているが、一〇㍥当り収益一〇万円を目標に作付を高度化する一方、ミツバ、ウド等のいわゆる芽物栽培に漸時経営の主体をもつて行くように考へている。労力、地価等の立地条件から一〇㍥一〇万円以上という線を出された事と思うが、そのために現在作付の主体をなしている果菜でも、ピニールトンネル、紙被覆を取り入れる等努力面から見ても合理的な作付を計るとともに、質の向上にも努力されている。

## 作付の主なものを紹介すると

タイナ、ダイコン、カブのピニール被覆三月下〜四月上旬にかけて数回に分けて播種し、トマト、キウリにビニールを使用する迄被覆を続け、四月中旬以降も順次露地ものの播種を行ない長期間平均して出荷するのを狙いとしている。春先は果菜の育苗を始めなかなか忙しいけれども、葉根菜のトンネルの管理は割合簡単に出来るから、二五畝ぐらいのトンネルをこしらえている。

春の葉菜としてはこのほかに白菜があるけれども、紙被覆程度に止め成可く種類を限定する様にしておる。これらの早出し葉根菜の跡地には、ナス、カシラン(中晩生)、シロウリ、ハクサイ(七月始めから播種を始める)と、ミツバの根の養成に当てる。

栽培(二月下旬播種〜五月上旬定植)と、三月下旬播種の露地栽培の二本立てを行なっているが、三笠や美唄ものと熟期の点で競争にならない上に、病害の発生が年々増える傾向にあるので反別は縮小しているというのである。

キウリについては相当手間も必要だが、果菜として一番収益も多いので、特に力を入れ、面積が多いばかりでなく、栽培型も色々工夫して取入れている。

これらの栽培型を取入れているのは、労力の点と出荷時期の関係からで、労力の配分は大体うまくいつているということである。一般に札幌近郊のキウリ栽培の特色は早期から秋晩く迄収穫を続けるということ、ビニール被覆しても春先の風が強く、管理に多くの手間を要し、旭川等から見るとおくれるので、秋の漬込期の需要を狙う

キウリの栽培型	播種期
ピニール被覆	三月下旬
紙被覆	四月一〇日頃
露地栽培	四月二〇日頃
晩播栽培	六月中旬

形をとっているわけである。ビニールトンネル栽培では五月下旬から六月上旬から収穫が始まるから、木を秋迄保つにはそれだけ管理が大変な事になる。特に綿密な薬剤散布を行なうばかりでなく、施肥設計、特に追肥の方法、時期にコツが要る。海老名さんの施肥設計は堆肥、鶏糞を別にして一〇㍗当り要素量、N三八㍗、P二〇㍗、K三六㍗で、基肥は石灰窒素六〇㍗、熔燐六〇㍗を耕起前全面撒布し、硫酸四〇㍗、尿素二〇㍗、過石四〇㍗、塩加二〇㍗を一部畦に施す外は整地時に撒布する。追肥は尿素一〇㍗、塩加二〇㍗ぐらいを第一回に施し、二回目は硝安一〇㍗、塩加二〇㍗ぐらいを八月中旬頃、樹勢の回復をはかるために施している。品種は一樣に加賀系を使い、特

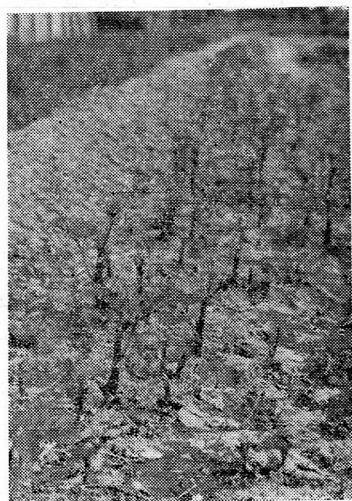


海老名さんと胡瓜畑

に晩播栽培の場合、病害に弱いので幼苗から念入りに薬剤を撒布しなければならぬ。晩播栽培は収量少ないが、秋晩になつて早期栽培ものの品質の低下する時期に良質のものを生産するので好都合のようである。

### 経営を見て

海老名さんの畑は、宅地の谷間にある耕地と言つてもいいくらいの状態になつていゝるが、地力の増強ということに関しては現在も、いささかも変つていない。堆肥肥の多施を常に考えていられ、現在もイナワラのニヨウが住宅の傍に高く積まれている。四畝の關係から、牛や豚等の家畜を入れることは困難になつたが、馬車屋、養豚場に依頼して、イナワラを提供して踏ましてもいい、堆肥肥の増産をはかつていゝるので、キウリやトマト等には充分施すだけの量を確保している。ちなみに年間一八、〇〇〇㍗ぐらいのイネワラと、鶏糞一車(三百俵ぐらい)を購入しているということである。輪作はトンネルによる早熟がふえていゝるため一定の線を決めるわけには行かないが、経営面積が広いことと、なるべく作物の種類を抑えるようにしていゝるので、キウリで三年に一作、ナス、トマトで四年に一度の割で作付を計画してゐる。例えばキウリでは、一年目(キウリ)——二年目(促成菜類—カンランカミツバ)——三年目(促成菜類—カンラン)という形になり、カンランについては二—三年にわたつて連続することがある。根瘤の防除には神経をつ



秋日の終つたウド畑

かつていゝるので、作付作物の關係から止むを得ないのでないかと思われゝる。

販売が有利に行なえていゝる。勿論良質多取の為の努力を行なつておられるが、都心に近いので市場の出荷もし易く、特定の八百屋さんの予約もあつて販売は良くいつていゝる。選別した二級品も近所の住宅の主婦が直接買ひに来るので手間のかかる反面、有利に販売出来、しかも付近の人から見ると新鮮でしかも安価に買えるので喜ばれていゝるということである。

今迄は消費地に近いということから有利に経営が行なえて来たが、周囲に住宅が増えたことから、有名な馬糞風はある程度抑えられるといつて見たところで、旭川や美唄等と時期的な競争は考えられず、病害虫のふえて来たことである。一応は地力の維持と、技術でもつてカバーすることができたが、立地条件から見て、地価の暴騰、労力面で更に収益の増加を図らねばならぬ。病害虫の多発が考えられるし地力も低下するおそれがある。そこで海老名さんは今迄の

ような経営をそのまま続けていたのでは、新しい産地と太刀打ち出来ない状態になり、経営の行詰ることを心配して、対策として経営の改善を考え、徐々に芽物栽培の方向にもつて行こうと努力されていゝる。

現在とりあげていゝる芽物栽培は、ミツバとウドで、ミツ

バは二〇㍗ぐらいの根株の養成を行なつていゝる。以前はトマト等の間作が主体をなしていたけれども、単作の手播とし、五月中旬から、多少の抽臺を見こしての早播が行なわれていゝる。促成は踏込利用のフレームを利用していゝるが、追々出荷の幅を広める計画をもつていゝる。

ウドについては需要の点と、根株の養成に府県より適してゐるということと、目下グループをつくつて、品種の問題、促成抑制技術の問題、根株養成を郊外の畑作地帯で行なう問題について研究を進めていゝる。

消費の面の動きを見て芽物の需要は常時要求され、第一に鮮度が要求されることから、従来のように府県の移入ものに占められることなく、札幌近郊にもこれらの産地の確立されることを期待し、海老名さんの御努力をお願いしたい。

(雪印種苗 上野幌育種場 園芸作物担当者)

